
HERO

沙里音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HERO

【Nコード】

N9560C

【作者名】

沙里音

【あらすじ】

男の子の視点でみた恋物語です。＊登場人物＊主人公：三村和俊
彼女：山下香澄友人：鈴木耕介友人：神田裕弥

第一話

どんな時も笑ってた。

どんな時も笑っててほしかったから。

やべ、マジで俺ヒーローみたいじゃね？

「合コン？おー行く行く！」

気ままに行った合コンで、俺は“うんめーのであい”をした。

合コンって言うよりは、三組でデートって感じだったかも。
三対三。

でももう裕弥と耕介は相手決ってたし。

余ってるのは俺とー…あと、合コンとか あんまやんなそうな女の子。

ちよつと冷めたような横顔。
なんか初々しい雰囲気。

まあはっきり言えば、一目惚れだった。

「俺三村和俊、よろしくー。」

「あ、うん、よろしく。」

って言っても、かわいいーなって、そんな程度。
そんなもんじゃん？恋愛って。

「えーそっちの名前はー？」

少なくとも今までの俺はそうだった。

別にそんな、かなり本気になることなんてなかった。

ナイフ向けて手放せって言われれば、ためらいもなく手放せるような、そんな。

「ああ！えっと、山下香澄。」

「ぷははッ！」

「え？何で名前ゆって笑うの？」

「や、ギャップがさあ！あはは！」

「ギャップー？」

あーなんかおもしろい！
天然？

「だってさあ、ダルそうな顔してっから冷めてんのかと思って。」

「ええ、ダルそうな顔してた？」

「うん してるー。」

「え、今も？しつれーだなー。」

「あはは！」

こーゆーノリ、いいな。

初対面の感じしない。

や、あるんだけど。他の男とか女でも、よく。

でもなんかー、うん、なんか、いいな。

「ねえ、アドレス教えてくんない？」

「えっ。」

「“え”ってゆうの四回目ー！」

「え、数えてたの！？」

「ぎゃははっ、五回目ー！」

「もう、」

何かかわいー。

今まで俺の回りにいなかったタイプ。

あんま男慣れしてなさそう。

アドレス教えてもらって、それからけっこう連絡取るようになった。映画とかボーリングとかカラオケとか、当たり前障りのないところに良く行った。

一緒にいたら楽しかった。

「好きになっちゃったんだけど。」

告白したのは、なんつーか、悪く言えばナリユキ。

嘘じゃねーし。
ほんと好きだし。

「てゆーか、ずっと好きだったんだけど。」

上目遣いでゆってみる。

落ちろ！

「うん。」

よっしゃー！！

「うん、あたしも、好きだった。」

そんな、どこにでも有り触れてる恋愛。

俺だってそれなりに恋愛経験あるし。

なのに、何か、それはまるで初恋みたいな恋だった。

嬉しくて、思いっきり抱き締めてしまった。

「ちょ、痛いって三村くん。」

「かずとしー!」

ぎゅーって、離してなんかやんない。

「…痛いよ、和俊。」

あー、これを 愛しいってゅーんだ。

高校二年の秋。

“アイ”って言葉のほんとの意味を初めて知った。

純粹に傍にいたいと思った。

純粹に笑ってほしいと思った。

純粹に何かしてやりたいって。

幸せにしてやりたいって 思った。

第二話

「みなもしゅーこれが目に入らぬか！普通自動二輪免許取ったりー
！！」

いえーい！

うっしゃア！長年の夢叶ったり！！

「べつに長年の夢でもなかっただろ。」

「うおっ、耕介今俺の心の中読んだ！？」

「つつーか、俺達はもう既に乗ってるし。」

「だな。カズは何で今まで取らなかったんだ？」

裕弥と耕介は、高校入ったらすぐに免許を取った。学校とかには乗っていけないけど、あると何かと便利らしい。

俺が持っていないって言ったら、何か意外がられる。

「だってめんどかつたしー。しかもお前らの乗ってんのって原付じやん！しかも一種！」

「充分だろ。」

「逆になんでわざわざ自動二輪なんだよ。」

そりゃ、普通自動二輪は金も時間もかかる。原付一種なら一日で取れるし。

でも制限が多いから、どうせなら二種って思ってた。

でもそれなら、十六歳で取れるもん取っとこーって。

「だってさ、二人乗り出来んじゃん。」

原付一種だと、出来ない。

「…ああ、彼女のためか。」

「なるほどな。」

十八になったら、車の免許取りに行く。
そんでドライブとかすんだ！。

楽しみ！

それからは、俺のバイクで出かけることも多くなった。

けっこう遠出もした。

温泉行ったり、って高校生カップルが温泉かよって感じなんだけど。

ま、楽しかったし。

これからもっと色んなところ行きたいよなー。

第三話

俺達は普通のカップルより、少し多めに喧嘩してたと思う。

つつつてもどれもこれも些細なことなんだけど。
すぐに仲直りしたし。

でもまあ、色々あって、別れよっかなーって思ったこともある。

だけど俺達は それを全部乗り越えて 一緒にいた。

一番険悪だったのはー…なんだろう、あ、“お前俺のヨーグルト食ったな”事件！？
うん、それだな、それ。あいつめ…俺のヨーグルト…しかも逆ギレするしー。
って、今思うとくだらねーな、ほんと。

もしかして俺らってけっこー平和？

あははー、あんなで別れるとか悩んでたんだっけー。笑えるなあ。

…あ、もいっこあった。険悪なの。俺の一方的だけど。

たしかー、付き合い始めて二カ月くらいんとき。

「あ、香澄？今どこ？」

暇だったから電話して、どっか遊びにいこーかなーって。

『え？今？』

「あれ？何で小声？もしかしてまた本読んでんのー？」

『うん、図書館だから。あとでいい？切るよー？』

ええ！彼氏がこんな暇してんのにー！？
香澄は本が好き。

なんか、けっこー字のちっちゃーヤツとか部屋にあるし、よく読んでいる。

「今ひとり？」

『うつん、違うけど…』

「なーどっか行かねー？」

『え？』

「つか誰といんの？」

『誰って、鈴木君だよ。』

…。
は！？

「鈴木くんって、え、鈴木くん！？つか耕介！？ちょっとお前ら
そこで待ってるな！」

『は？』

「だから行くから。」

『ちょっといいよ、何言ってるの。』

「行く！」

『いいてば。』

なんだよそれ！俺がこんな暇してるときにー！！
…って、それはかんけーないけど。

うわー、耕介？よりもよって耕介と…。

「浮気！」

『だからそんなじゃないし。』

だから何もねー！
こんなときにまで冷静だし。冷めてるし！

「とにかく行くからな!!」

『はあ? ちょ、和俊?』

無理やり電話を切ってやった。

バイク飛ばして図書館に着いたら、階段上ったところに 香澄と耕介がいた。

「何やってんだよお前は!!」

怒鳴ったら、なんか適当に言い訳しやがった。
俺がそんなに騙されるわけねー!

「和俊、ほんとに偶然だったし本の話しかしてないよ。」

耕介も、本が好き。
気 合うのかな。

「俺はいいけど、彼女なんだから 香澄のことくらい信用…。」

…は!?

「香澄いい…!?!」

耕介は、しまった、っていう顔をする。

「…別に深い意味ないから。呼びにくかったただけだし。」

「呼びにくさとか変わんねーじゃん!」

いつの間に呼び捨てしてんだよ!!

まさか 香澄も耕介とか…。

「ねー、くだらないって和俊ー、もうやめよーよ。」

香澄の言葉に目を見開く。
何だよそれ！

「下らない！？お前なア、こっちがどんな。」

「もう和俊！」

香澄がいきなり大声だした。
ちよつとたじろぐ俺。

なんだよ！俺はぜんっぜん悪くねーのに！！

「あのね、あたしは！和俊だけでいいーから。」

…へ？

「…。」

俺は声も出なかった。
多分耕介も呆然としてて、香澄はちょっと照れてる。

「…じゃあね、帰る。」

俺達に背を向けて、図書館の前の石段を降りていく。
家が近くだから、歩いて…。

「あ、香澄…っ。」

声だけかけて、でもまだ驚いたまんまで追いかけられなかった。

なんで…別にあんなのふつーじゃん。
もっと凄いのとか、今までいっぱい言われ…。

あ、そっか。

香澄は違う。香澄はあんま言わない。

「…。」

口に手を当てる。

やっべ…嬉し…。

俺。

こんな 惚れてたっけ…。

「…カズ、ごめん。呼び方、嫌ならやめるから。」

なんか歓喜しすぎて、横に耕介がいるの忘れてた。

あ、そつか。呼び方で俺怒ったんじゃん。

なのに今となつては、全然怒る要素なんてないことのように思えた。

「…お前だから、許すんだかな。」

俺って単純！

「はは。」

「何だよ。」

えー、こんな場面で笑うかあ？ふっ！

「いや、カズってかなり嫉妬深いんだな。初めてみた。」

…。
あ、…うん、そーかも。

俺もこんなん、初めてかも。

っーかさ。

…なんか俺、何で怒ってたんだろ。

別に大したことじゃなくね？

俺だつてさ、女の子と付き合ってたときに他の子と遊びに行ったことあんじゃん。

…香澄と付き合ってから、一回くらい、あったかも。

「みつともねーよな、かなり惚れてるかも。」

何それ。

自分は良くても相手のことは許せねーの？

それっでどーよ、俺。

「確かにみつともねーな。」

「ええッ、そこはそんなことねーよって言っただろふっー!!」

「はは。でもいいんじゃない？それが恋愛ってやつだろ。」

耕介の話を聞きながら、いつもみたいに話す。

やっぱ俺らって、簡単に壊れねーよなって、思った。

夕方、バイクでゆっくりと走る帰り道。

空が赤くて、なんとなくお前を思い出した。

なんか…。

俺 いつの間にか、こんな好きになってたんだ…。

そう思ったら笑えた。

喧嘩中なのに、幸せで笑ってしまった。

謝りに行こう。

いつもみたいに、きつと冷めた顔で、もーいいよって言うてくれる
だろーから。

あ、でもやっぱ耕介は警戒範囲ね！
油断大敵！

第四話

「ヒーローとか好きなの？」

俺の前には映画のパンフレット。香澄は本を読んでいる。
パンフレットのキャッチフレーズを心の中で読んだ。

『世界中が絶望の声に溢れていても 君のためだけに戦い続ける』

…だって。笑える。

ヒーローって世界中のために戦うんだと思ってたけど、違うんだ？

「んー、嫌いじゃないよ。」

映画みよう！って話から、ヒーローの話になった。
なんか反応してたから。

「意外！ヒーローとか王子様とか大ッ好きなんだ！」

「そこまで言ってないよ！」

あはは！意外すぎて笑える！

だって冷めてるし！。

そんなん苦手そうなのに、嫌いじゃないって！嫌いじゃないって！

でも俺は、お前が望むなら何にだってなれるんじゃねーかと思った。

だから。

「じゃあ俺は、ヒーローになる。」

だから、嘘じゃねーよ？

ほんとにほんとに、やっぱりみつともないところなんて見せたくないって思ったんだ。

俺はお前にとって、いつでもかっこいいヒーローでいたい。

なんて、どっかのベタな恋愛映画みたいだな。

本気で恋したら、こんなバカみたいなこと思っただって知った。

何か笑えるなあ。

俺ってこんなのかっこわるいと思ってたから。

なあ？

どこにでもある、こんなありふれた愛情だけど。

いつでも笑ってるよ。

いつでも笑っててよ。

第五話

ひっさしぶりの、買い物ー。
今日の俺はあー上機嫌ー。

「ん？」

ほんとに久しぶりに、一人で買い物してた。
今日はラッキーデー。
一人で買い物な行くとよし！…って、テレビの占い番組でやってた。

ぶはは、笑えるー。別にそんなのどーでもいいんだけどさ。

何でも信じてみたくなる。
なんかそんな、清々しい気分。

実際良い買い物ばかりしちゃったしー。

「
おお？」

そんで、めっちゃ可愛いの見つけた！

「
おっちゃん、これいくらー？」

「
おっ、お目が高いねーぼっや！ママにあげるのかい？」

「
ぼーやじゃねえよっ！彼女にプレゼント！！！」

「
わ、すまんすまん。」

おっちゃん目え悪いのか！？

高校生にもなってぼっやって言われたのは初めてだ！！

…えーと、出店？ってゆーの？これ。
なんか路上に座り込んで売ってるやつ。そこに可愛い指輪発見！
ほんとにあいつに似合いそう。

やっぱり今日の俺ってついてる感じ！！

「これちょーだい。」

「はいよ。」

キラキラしてる。
かわいーし、きれー。

今度遊ぶときにあげよ！プロポーズでもしちゃうか！？

…って、バカだな。
高校生のくせになー。

俺は出店のおっちゃんからその小さい指輪を受け取って、鞆の中に入れた。

喜ぶことなら何でもしつやりたかった。

いっぱい知りたかった。

こんなの渡したとき、どんな顔するんだろーとか。

そんなちっちゃなこと。

あ、そーいやあもう付き合って一年だなあ。

だけど俺達に特別な日なんていらなかった。

何でもない毎日を　一緒にいられば嬉しかった。

第六話

「じゃあな、来週の日曜日、バイクで迎えに来るから。」

いつも通りの、デートの帰り。

やっぱり指輪は渡さなかった。まだ鞆の中。

なんか特別な雰囲気かほしーよなあー、うん。

「どこいくの？」

「まあまあ、行ってのお楽しみー。」

「なにそれー。」

つて、ごめん。

まだ決めてない。

別にどこでもいいんだけどー、やっぱり一周年記念も込めて?…な
ーんて。

「またな。」

いつもみたいに、それだけ言って別れる。

名残惜しむでもなく、手を振るでもなく。

いつも通りの 終り。

思ってたなかった このときは。

もう会えないかもしれないって、一瞬でも考えてたら、もっと特別
な別れ方も出来たかなあ。

… ああ、もう、信号が長い。

いつも通りのその帰り道を、いつも通りバイクで帰る。

信号を待ちながら辺りを見渡した。

あ、ここ、前に耕介と裕弥と海行ったときに通ったな。

あん時はー裕弥が落ち込んでー、励ますために…。
あり？裕弥何で落ち込んでたんだっけ？

… まあいつかあ、ナイーブだしな、あいつ。色々あんだ、うん。

つーか励ますために行ったのに結局俺が一番はしゃいじゃったんだっけ？

そーいえば耕介が怒ってたよーな。

ぷっ、懐かしー。

… ん？うみ？

… 海ー！！そーだよ海じゃん！海海ー！！雰囲気と言ったら海だよな！

おお！！

俺って天才？

そーだ下見しとくか？確か右折だ、ここ。

信号が青に変わる。

とっさに決めた右折。

対向車がいなくなつて、走り出す。

トラックの陰。

スピードに乗った乗用車。

…… 右直事故っ！

「ッ!」

キイイイイイッ

痛くて痛くて 薄れていく意識の中、なあ？

死ぬかっと思った瞬間 お前だけが俺の視界を占拠してた。
おかしいよな。

第七話

気が付いたら、何か体が自分のもんじゃないみたいだった。

力、入らねー。
動かない。

駄目だ。

何 これ。

「……ず……し………？」

誰。

何
怖い。

「和俊…？和俊…ッ和俊！？」

何回も呼ばなくても聞こえてるって…ああ、母さんだ。

あれ…？父さんもいる。

あ、視界がぼやけ…。

ああ、誰だ？もう一人…ん？二人？

ボーっとしてる。

痛い！頭…腕も、足も…全部痛い！！

「三村和俊くん？分かるかな？」

だれ…知らねー声…。

白い。

ああ…医者？
看護師もいる。

何だこの緑っぽい部屋。

「…。」

体中に、何かついてる。

気持ち悪い。重い。

取って なに 嫌だ。

「和俊！良かった…分かるのね！？ねえ！」

「和俊…！」

母さん 父さん。

おれ 俺…。

ああ、事故ったん…だっけ…。

運わりー。

…、…違うか。

バカだ、俺。偶然事故にあったわけじゃねーよな。
今まで 偶然 事故にあわなかったただけなんだ。

いつ死んだっておかしくなかったのかな。

そう思うとちょっと ゾツとするけど。

あの日 お前を想いながら 海に気を取られて。
死ぬと思った瞬間に それでもやっぱりお前を想えたこと。

名誉だって言ったら 怒るかな。

第八話

「……。」

医者は、母さんと父さんに話があるって言って隣の部屋に入った。
暗い部屋だなあ、なんかやだ。
こわい。いたい。きもちわるい。

おれ 死ぬ？

…死ぬの？なあ、誰か。

誰か！

『かずとし。』

…香澄…。

香澄、あいたい…。

…や、だめだ。

だめだ、こんなところ、見せられない。

やばい。

目を閉じたら、死んでしまいそうになる。

ぐるぐる、頭回る。

痛い。

「三村君、ごめんな。体気持ち悪いだろう、今拭くから。」

男の看護師が話しかけてきた。
拭くって…。

そいつは、俺の着てるものを脱がせて丁寧に体を拭いてくれた。

…やめろよ、気持ち悪い。

いやだ。

悔しい。

こんなにも自分で出来ない。

そうか。

俺はどのくらい眠り続けてた？

その間ずっと 体についてた気持ち悪いもの。

口に酸素送るやつ？とか…あとケツも気持ち悪い…。
そりゃ、寝てる俺がトイレ行けるわけないけど。

悔しい。
悔しい。
悔しい。

それを声に出来ないことが また。

「…ッ。」

泣きそうになった。

もういつそ死んでしまいたいと思った。

「和俊…っ。」

母さんと父さんが帰ってきた。
悲しい顔？

ああ やっぱ俺 死ぬの。

「和俊、大丈夫？どこか痛いところない？」

バカだな…痛いよ 全身痛い。

でもそれより、悔しい。

トイレも行けない。
風呂にも入れない。
汚いところ全部見せて 全部世話してもらわなきゃなんない。

悔しかった。

恥かかった。

こんななら、死にたい。

もう死んでしまいたい。

ただの晒しもんじゃない。情けねー。

「和俊？」

死にたい　死にたい。

苦しい！しんどい！
もう……嫌だ……。

「……い……っ、悔し……。」

どんなに苦しくても、それを吐き出す術もなかった。

悔しさに 拳を握り締める力もなかった。

何だよ俺。

第一声がそれかよ。

親不孝もんだあ……ごめん……。

ごめん 母さん 父さ……。

母さんは泣いた。

父さんはそれを支えるように立っていた。

俺はそんな二人に目を向けながら、やっぱり生きたいって思った。

第九話

また母さんと父さんが隣の部屋に入ってく。
なんだよ、それ。意味分かんねえ。

したら、母さんだけが入ってきた。

「…。」

俺の手を握って、そのままジッとしてる。

あったかい あったかい。
生きてる。

「…の……。」

「え？どうしたの？何和俊！」

かろうじて声が出る。

あれ、大分楽になった…？

ああ、痛いの通り越してんのかな。

うわ重症じゃん。

「れ…死…の。」

俺 死ぬの？

こわいな。

こわいなあ、実際こんななってみると。

ほんと悔しいよ。

「…ッ…ないで…！」

え？

なに、母さん。

「死なないで…え…ッ…！」

泣き叫ぶような母さんの声に、不覚にも泣いてしまった。

…泣いたというよりも、勝手に涙が溢れてった。

答えになってねーよ、母さん。

母さん ごめん。ほんと、俺親不孝もん…。

悔しー…。

悔し。

「ん。」

しゃべりにくい。
なんだよこれ。

「かあ…さ…。」

やだな。
泣くなよ。
泣くなよ。

親が泣いてるの見んのって、けっこー嫌なもんなんだからな。

なあ 俺のこと なんかで…なあ。

「…耕介…裕弥……呼ん…。」

「耕介君と裕弥君？分かった！今呼んでくるからね。」

「あ…。」

俺がまだ続きがあるように声を出すと、母さんは立ち止まった。

「香澄…。」

「分かってるよ、香澄ちゃんもちゃんと…。」

「…呼ば…な…。」

「え？」

呼ばないで。

あいつだけは。

ヒーローでいるって約束したんだ。

「……こんな…見せ……。」

見せねえよ。
あいつだけには。

「…分かった。」

ああ、すげえ。

母親ってすげえ。

途切れ途切れの言葉、自分でも分かんないくらいなのに。こんな
で。

母さんはまず隣の部屋に入って、医者 of 許可を取ったようだった。

それからすぐに外に出て、またすぐに戻ってきた。

「すぐ来るからね。」

すぐ来るからね　すぐ来るからね。
そればかり繰り返して、俺の手を握った。

「ごめ…ちょっと、出てて……。」

「…和俊。」

うん、ごめん。

そりゃこんなんでも、息子だよな。

心配だよな、ごめんな。

「うん、分かった。分かったよ。」

親不孝ばっかの俺に、母さんは力強い顔で頷いてくれた。

そして医者も父さんも隣の部屋から出てきて、俺に一言ずつ声をかけて外に出て行った。

何て言ってたのかは、よく聞き取れなかった。

なあ。

俺 お前に何残してやれるだろう。

そう思ったら、一つしか浮かばなかったんだ。

ちゃんとかっこいいところ 見せるよ、最後まで。

だって約束したじゃん。

どんな時も 俺はお前の ヒーローでありたい。

第十話

耕介と裕弥が入って来る。

うつわ、何泣きそうな顔してんの、二人とも似合わねー。

あはは…。

……笑えないよ。
笑えないなあ。

「カズ!!」

裕弥は俺に勢い良く乗っかってきた。
うおっ！ええッそれはないだろ！

「ゆ……や……重……。」

「あッごめん！」

もー…相変わらず…。

ごめん。

心配かけて。

「…。」

あ…れ、いない。

そりゃ俺が呼ばなかったんだけど。

呼ぶなって言っただけど。

香澄…そんなんで納得するやつじゃねえのにな。

「香澄…？」

「あ、起こして来るよ。今寝てるんだ。無理やりにも連れて…。」

「耕介！」

うつ……てえ……思わず大声出してしまった。

…なんだ、出るじゃん。
だいじょうぶ、うん。

そっか、寝てたんだ。良かった、ちよーど良いじゃん。

「……………いい……から……。」

声。

もっと出て。

なあ。

「…頼み…ある…ん、けど。」

「え、なに？」

「……声…録音、できる……。」

何を残してやれるかな。

ごめん、会ってもやれねえで。
ああ 情けない。

「俺持ってくるから！家近いから、すぐ…ッ！」

…ゆづや。

ごめ…。

…。

「おれさ…あ…ヒーロー…なんだー…。」

「え？」

裕弥がテープを取りに行ってくれたあと、残った耕介に声をかける。

…耕介にっていうよりも、独り言かも。

「だからさ、…最後までかっこよく…いきてーの。」

こんなの、見せるわけには行かないってゆった。
誓いだったのかも。

うん、ごめんなあ、香澄…ごめん。

耕介は、ああ、と頷いてくれた。
取った手は やっぱり温かった。

「…これ…はずして…。」

耕介に、俺の口についてた何か重くて喋りにくいやつを外してもら

った。

急に息苦しくなったけど、しばらく沈黙が続いて慣れていった。

「…。」

パンツ、とドアが開いて、裕弥が入ってきた。
おお、早い…。

ごめんなー…めっちゃ走ってくれたんだろーな…。

「…これで、良いか。」

「ありがと…。」

うおっ、テープレコーダーかよ！なっつかしー。
裕弥のおばちゃんちよっと時代遅れだからなあ、助かった。あは…。

「…っ…持って…。」

俺はそれを耕介に持ってもらって、一息をついた。

ふう。

苦しい。しんどい。痛い。怖い。

ただとお前のためなら 最後までヒーローになる。

「俺が、ばいばいって…ゆったら止めて……。」

「…うん。」

ヒーローになる。

「…。」

カチ と音がする。

そう、俺はヒーロー。

お前のためにだけ 生きていたヒーロー。

「あー…聞こえてる？ 香澄。」

声が出る。

さっきの掠れた声じゃなくて。

あー、俺、この声どーやって出してんだろ。

「なんかいきなりごめんな、会ってもやれねえで。」

やっぱ俺って超人的なんじゃねーの！？
なんか痛みもふっきたよーな…。

「湿ったくなるかもだけど、きーて。いっぱい言いたいことあったよ。」

うん。

いっぱいある。言い残したことはばかり。

あー、もっともっともっと一緒にいたかったなあ。

でもそんなことは言っちゃんない。
弱音とか絶対、言わない。

「お前とはさ、知り合ってから、いろんなことあったよなあ。」

ちょっと昔話をして、初めて一目惚れだったんだって言った。

いっぱいあった。

出会ってから一年。

ほんとにいっぱい。

「守れなくてごめんな…。」

“ずーっと”

ごめんなあ　あの時は、ほんとにずっと一緒にいたいって思ってたんだよ。

“一緒に　いような”

「お前のー、妙に冷めてるところとかさあ、かなり好きだったわ、うん。」

ほんと。

お前　いっつも冷めてて、さあ。

「まあおかげで喧嘩したこともあったけどなあ。楽しかったけど、良い思い出ばかりでもないよな。ってか喧嘩のが多かったっけ？」

でも、喧嘩の思い出さえ楽しかった。
ほんとだよ

「けっこう本気で、悩んだこともあったよ。かなり苦しい時期もあったし。」

まあ誰にだってあるよな。うん。
別れ話とかも、あったっけかなあ。

「。。。」

あ、なんか、しんみりしちゃいそー。

「…うん、生きてたらさあ、苦しいよなあ。」

バカ。

弱音は言わねーって、決めたのに。

「だって俺、お前がいなくなったらマジ耐えらんねえし。」

うわ。こわ。

お前も？

これ、聞いているとき。

「お前もおんなじ気持ちなんかなあって思ったら、また苦しー…。」

座っている耕介の顔が、泣いてるように見える。
傍に立つ裕弥の拳は、強く握り締められていた。

「でも、生きてたら苦しいけど、生きてることって
すっげー嬉しいよ。」

うん。

死ぬって思ってから気付いてんだけどね。

「だかなな、笑っててな？したら俺も嬉しいから。」

おお！めっちゃヒーローみてーだ！
あはは、なっさけねーヒーローだなあ。

笑ってて じゃなくて、本当は。

俺がお前を 笑わせてやりたかったな もっと。

ずっと一緒にいたかった、…なんて。

言わないけどな。
言えないけどな。

「なあ？ 俺は えーえんのヒーローになるから。」

だから 思っ
ていて。

最後までヒーローだっ
たって。
こんなカッコ悪い じゃ
なくて。

ちゃんと最後まで。

「ずっと お前だけの。」

笑ってたって。

「今までありがとう。お前のおかげでさあ、
すっげえ楽しかったよ。」

けっこー長く喋ったかな。
疲れた。

でも言いたかったのは、生きてってこと。

「あ、初めてゆうなあ、今まで好きだーってしかゆっつなかったから。」

笑ってて ずっと。

ずっとずーっと。

「寒いって笑うなよ？」

今までも。

今も。

この先も。

「愛してる 香澄。」

愛してるって こと。

「…。」

名残おし！。

お前いま どんな顔してんのかな。

やっぱり俺はいないんだろーな、もうこの世の何処にも。

「ばいばい…。」

カチ と音が鳴って、俺の言葉通り、耕介はテープを止めてくれた。

さよなら 香澄。

もう会うことのない“いとしい人”。

俺に、初めてこんな気持ちを教えてくれた人。

さよなら 愛してる。

愛してる。

第十一話

裕弥は何でだつて聞いた。

苦しいなら苦しいつて。

生きたいなら生きたいつて 言えばいいのにつて？

裕弥はまだ、この気持ちが分ないだらうな。

誰かを愛するつて 多分こう言うこと。

何かしてやりたいつて思うこと。

香澄 いつだつて俺は。

お前のヒーローでいたかつたんだ。

「本音なんて、あいつには……愛してるから、言っちゃらない。」

だから ごめんな。

言えねえわ、本音なんて。

苦しいなんて。

生きたい なんて。

一緒にいたい なんてさあ。

「…。」

裕弥、お前はまだ分んないかなあ。

難しいよな。

俺だって知らなかったよ。

香澄に会うまで こんな気持ちさ。

「…俺らには？」

死ぬときにまで、お前の前ではカッコ良くありたいなんて、貪欲だったかな？

「…じゃあ…俺らには？」

きつと、二人なら。

どんな酷い顔を見せたって、思い出してくれるだろうって。

ずっと一緒に笑ってたこととか。

「お前らは…好きだから………言っても…いい？」

大好きだから 二人には、本音さえ全てブツケテ泣いた。

生きたい。

死にたくない。

怖い。

もつと一緒にいたい。

会いたい。

いやだ。

情けないな。

これがヒーローだってゆう俺の、本音だよ、香澄。

お前の笑った顔。

仏頂面も 泣いた顔も。

照れてるのも怒ってるのも、悲しんでたり怖がってたり。

もう二度と見られないかな。

もう一度見たかったな。

こんな気持ちが恋なんだって 出会って初めて知ったんだ。

耕介。

俺が気付いてないとも思ってる？

言わないけど、頼むな、香澄のこと。

悔しいから言わないけどな！

第十二話

耕介も裕弥も泣いていた。

手を取り合いながら、一体どのくらい泣いただろう。

体の何処にこんな水分あったのかなってくらい、涙は止めどなく溢れた。

…人間って体中の水分、半分くらいなくなったら死ぬんじゃないかな？
たっけ？

三分のー？あれ、二だっけ？

…あ。

あ！？何、大事なことを忘れてんの俺！

泣いて泣いて泣いて、ムードだらけだったその病室で、俺は一人手を離して二人を呼んだ。

なんか分らないけど、笑えてしまった。

「かば…ん、」

俺は裕弥に、事故の時に持っていた鞆を持って来てもらった。
良かった。あつたんだ。

もう鞆さえグチャグチャになってんのかと思った。

耕介が中を開けて、指輪を取り出してくれた。

傷一つ入ってないじゃん。
奇跡だ。

「それ…渡して…。」

もー。

何やってんだろ、ほんと、俺。

「約束の日…海に行くつもりだったんだ…」

うん、約束いっぱいしたのに。

ぜーんぶ破っちゃうんだよな。ごめん。

「海？こんな寒いのに…？」

「はは……、ん……。ほら、海が一番…雰囲気出るじゃん？」

ぷ。

笑えるよなあ、ばつかみたい。

うん。それ、本気だったなんて。

「日曜日にさあ…朝からバイク飛ばして……海行つて、プロポーズでも…て……。」

ああ そうだ。

「シャレになんね…日曜じゃなくて良かった…。」

そうだ、お前を、後ろに乗せて。

あ、れ。

良かった。良かった。良かった。

良かった？

こんな痛いのに。

こんな苦しいのに。

「あいつが無事で………かった……ッ。」

良かったよ。お前は 生きてる。

生きてて。

第十三話

なあ。

お前の笑顔は連れてかない。
ずっと笑ってほしいから。

俺は涙を持っていく。

だから俺が死ぬことで 泣いたりなんかしないでほしい。

覚えていてほしいのは 死んでいくことじゃないんだ。

生きてたことだよ。

ずっと一緒に 生きてたこと。

「医者がなんか、帰れって…。」

「絶対明日も来るからな。」

裕弥も耕介も泣きはらした目だった。
見たことねーの。あは。

はは…。

「…ん。」

明日　なんて　俺には。

ないこと多分、何処かで感じていた。

それでも出来るだけ自然に笑った。

「じゃあね。」

それに安心したように、耕介が言って背を向ける。

裕弥が一度だけ振り返って、小さく笑ってまた俺に背を向けた。

一気に静まりかえったそこに、すぐに母さんと父さんが入って来る。

おわ。

もしかして、ずっとこの外にいたのかな。

「和俊…今夜はお母さん達、ずっと此処にいても良い…?」

母さんの言葉に、俺は小さく笑った。

表情で表すことでしか、もう、返事も出来なくなってた。

気付けば視界もぼやけていた。

ボーっとしていたのか、寝ていたのか分らなかった。
ただ体が、ほんとに自分のものじゃないみたいで。

「…。」

ふわふわ 浮いてる。

「…よ、る？」

「和俊…起きた？もうすぐ朝よ。窓もないから、分んないね。」

母さんの即答が返って来る。

その声を聞いた途端何でか眠たくなって、母さんは起きた？と聞いたけど、やっぱり自分はボーっとしていただけだったと悟った。

眠い。

第十四話

「和俊、寒くないか？」

「暖房きかせてもらえないかしらね、…。」

父さんの声も母さんの声も優しかった。
優しすぎて 怖かった。

「…。」

小さく小さく声を出した。

何かが燃え尽きそうなことを感じてた。

「なに？なに、和俊。」

あ、届いてたんだ。
よかった。

「…れ、」

やべー。

また泣きそう。

なんで。

「…れ…最後に、会ってやることも……。」

何処までも 何度でも 思っんだ。
お前のことばかり。

お前のことばかり。

「何も…て、やれなか…。」

最後まで元気だったって、思わせてやりたかったんだ。
あのテープ聞いて、お前がそう思ってくれと良いな。
でもさ、本音聞いてほしかったのも、嘘じゃないよ。

「…和俊…。」

意地張って、見せらんなくて、会わなかったけど。

会いたかったのも ほんとだよ。

「和俊…違うわ、そうじゃない。」

母さんが、ゆっくりと話す。

「和俊は 香澄ちゃんに、してあげたい事がいっぱいあったのよ。
…ね、いっぱいあって…ありすぎて。」

俺は黙って聞いていた。
もう瞬きするのさえ辛かった。

「してあげる事が出来たたくさんのことを、何でもないことのように
に思ってしまうだけよ。」

『和俊』

「ほら、思い出して？だって私、見たことないもの。」

『あのね あたしは』

『和俊だけでいいから』

「和俊の隣で、幸せそうな 香澄ちゃんしか、見たことないもの。」

『うん、あたしも 好きだった』

香澄。

「……ね……？」

香澄。

俺 愛されてた？
ちゃんとお前に 愛されてた？

うん。だったらそれだけで、生まれた意味、あるって思えるよ。
変かな。

「ん……うん。」

なあ、此处で懺悔なんだけどー。
俺さ、謝らなきゃなんないこといっぱいあんだ。

えっとまずさ、香澄のピアス壊しちゃったの俺なんだ。

お前いつの間にか壊れたってゆってたけど、俺が踏んじったの。
痛かったわーあれ。…や、マジごめん。

あと新発売のお菓子、なんて名前だっけ？あれ一緒に食おうって買ったのに一人で食っちゃったことと。
だっておいしかったんだもんさ！。

今度お前にも買って…って、今度なんてないんだっけか。 うん。

…あとは、あ、香澄の部屋の壁紙の隅っこに勝手に俺の名前書きやっただった！

見つけたらビビるだろーな！。ごめんっ！

あ、それにこの前借りたCDまだ返してないし。
香澄と付き合ってから何回か女の子と遊んじやったこと。
耕介とのこと、疑ったことも。

あとさ、約束、守れなくてごめん。

一緒にいるってゆったのにさ。

うん 俺 死んじやってごめんな。
最後までカッコ付けてばっかで。

どーしよーもない彼氏だったよな？

よわっちい ヒーローだったよな。

「……ん。」

俺は思いを巡らせながら 母さんの声に涙を流した。

母親を、生まれて初めて、めっちゃくちゃ強いと思った。
良い親に恵まれたと思った。

俺は笑った。

泣きながら、笑った。

泣き叫びたかったけど、笑ってた。

静かに静かに。

最期は笑っていようと思ってたから。
憶えてほしいのは、泣き顔なんかじゃなかったから。

母さん きつと。

香澄も同じ事を言ってくれるんじゃないかなって 思えたんだ。

なんか 香澄の声みたいだった。
安心した。

ほんと安心した。

「...。」

全部許された、みたいな感じ。

「ちょっと…寝て…いい？ちょっとだけ……。」

母さん 俺は、嘘つきで。

どうしようもない息子だったけど。

これほど残酷な嘘はないよな。ごめん。

でも俺は、今日ほど嘘つきで良かったって思ったことないよ。

「うん、いいよ。」

最後にそう言って、優しく笑う母さんが見れたから。

ごめんな。最後まで こんなんです。

ふ と 笑って目を閉じる。
楽になれた瞬間。

ピーーーーー

ごめん みんな。

「……ず……とし……？」

そう 覚えていたいののは、泣き顔なんかじゃなかったから。

「和俊……？」

覚えていてほしいのも やっぱり笑った顔だったから。

だからこんなを見せられない。

好きなヤツにはカッコイイところだけ見てほしいって、別におかしいことじゃないだろ？なあ、香澄。

「ねえ…、ね……。」

ごめんな、香澄。

お前の中の俺が 永遠のヒーローになるように。

ずっとずっと。

ずーっと、ヒーローであり続けるように。

「いやあああああつ、和俊いいいいー!!」

いつも陽気な母親の。

叫ぶ初めてのその声は 俺に 届くことはなかった。

最終話

さようなら、大好きな人たち。

最後まで 最期まで ほんとに大好きだったから。

でも ごめんな。

やっぱり最期まで お前ばっかを思ってたよ。

一緒にいたいって思うことの もしも何かがいけなかったなら。

残酷だよナア カミサマ。

天使になんて なれねーけど。

この空を飛び回って。

お前が呼んだらすぐに駆けつける。
永遠のヒーローになりたい。

たった一人 お前だけの。

この目が見えなくなっても この耳が聞こえなくなっても。

お前の笑顔は忘れないから。 お前の声は思い出すから。

この身に実体がなくなっても、抱き締める腕をなくしたとしても。

ずっとずっと お前だけを思い 想い続ける。

こんな人間離れた感情、生きてたら絶対味わえねーよ。

生きてたら、生きなくちゃいけないから。

お前一人の存在で、笑ってられるわけじゃないから。

でもさ、でももう俺、食料もいらないし。
世間体気にすることもないし。

勉強しなきゃなんないわけじゃないし。

将来とか考える必要もないし。

病気にもならないし眠ることもないから。

だからお前一人の存在で 笑ってられるよ。

お前も笑っててよ。

俺って嫉妬深いから、許せるかどうか分かんないけど。

俺じゃない誰かの隣で 楽しそうに笑っててよ。
幸せだって言って。

…あー、やっぱちょっとムカつくかも。

…うそ、うそ。

お前が笑うと 俺も嬉しいから。

未練なんてないよ。

…とは、やっぱちょっと言えないかなー？

いや俺ヒーローだからさ、ぜってー口には出さないんだけど。
新発売のお菓子とかまだ食べてないやつあるしさ！

アイスの季節も待ち遠しいし。

ゲームだってまだクリアしてないのあるし。

バイクだって全然乗り足らないだよな！

あとあと、…あと。

もっと一緒にいたかったな　なんて。

言ったらお前、なんてゆうかな。

ほんと、ヒーローなんかじゃないよなあ…。

守ってもやれないくせに、一緒にいてもやれないくせに。

ただ最後まで　かつこよくありたかったなんて。

なあ？一番の心残りは、お前との時間の後に死んでしまうことだよ。

お前、自分のこと、責めないでな。

お前とのデートの帰りにさ、お前のこと思いなが事故にあったなんて、俺にとっちゃ誇りなんだけど。

でもお前にとったらこんな気持ち、重いよなあ。

ね、俺、バカだからさ。

他にどんな幸せがあるかもしれないで、お前を本気っ好きになれたことを 世界一の幸せだって 思えちゃうんだ。

だから絶対に、お前のせいじゃないよ。

何度繰り返しても 俺はお前に会おう道を選ぶ。
例えまた苦しんで死ぬことになっても。

だから責めないで。
お前はお前を責めないで。

“世界中が哀しみの涙に溢れていても 僕は君のためだけに 笑い続けよう”

なーんて、一緒に行こうって言った、どっかのヒーロー映画のウリウケ。

あり、ウケウリだっけ？
ウリウリ？ウケウケ？
うーん、国語苦手ー。まあ良いや、うん。

三村和俊。
えーえんの、ヒーローになりにゆきます！

見守ってる。

お前達は。

お前は 生きて。

いつでも笑ってるから。

いつでも笑っててな。

お前の幸せが 俺を幸せにする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560c/>

HERO

2010年12月26日19時19分発行